

一の沢遺跡



笛吹市

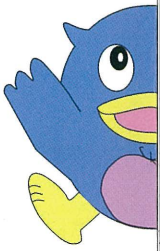
粘土の塊が煮炊きの道具となり、食料を生み出す。やがて、縄文土器には人々の精神世界が描かれるようになる。それは、幾何学文様であったり、デフォルメされた人や動物であったりする。縄文土器の装飾には、人々の喜びや悲しみ、祈りが凝縮されている。さあ、縄文人の精神世界の扉を開けよう！



写真：一の沢遺跡（一の沢西遺跡）出土土器（国指定重要文化財）
山梨県立考古博物館蔵、写真提供：山梨県立考古博物館



食と住、一の沢遺跡に見る生活の痕跡



立地

一の沢遺跡は、笛吹市境川町小黒坂の北西に向かう緩傾斜地の狐川左岸に広がる縄文時代中期を中心とした集落遺跡です。周辺には横穴式石室をもつ古墳群も見られます。

概要

過去数度の調査で縄文時代中期の大集落遺跡であることが確認されました。県が調査した4号住居跡、56号土坑から発見された土器群は優品であり、一括して国重要文化財に指定されています。

住

山梨県埋蔵文化財センターによる調査にて、中心に半径15mの広場を持ち、その周辺に幅20mの集落内墓域が広がり、さらにその周囲を住居が取り囲むという縄文時代中期中頃の集落内構造を明らかにすることができました。

食

一の沢遺跡背後の御坂山脈では、イノシシやクマ、シカなどが生息しています。山々には堅果類も豊富で、秋には豊かな恵みをもたらします。一の沢遺跡からは狩猟に用いた黒曜石製の矢尻や石匙（皮を削ぐナイフ）、堅果類をすり潰す石皿や磨石などが出土しています。近年の研究のなかで、縄文時代にはエゴマや豆類の栽培が行われていたことが知られています。一の沢遺跡の人々は、これらの栽培植物を主食としながら山の恵みである肉や堅果類を食べて暮らしていました。



一の沢遺跡の出土品は、山梨県立考古博物館や笛吹市春日居郷土館で見ることができます。



美の追求、豊かな感性、装飾の技！

文様

乾く前の土器表面に、縄を転がすと、縄目文様が描けます。細い竹を割って断面を土器表面に押し当てて引くと平行線が描けます。粘土紐を土器表面に貼り付けると隆線が描けます。縄文時代の土器の文様は、これらの手法を組み合わせで描かれます。文様の組み合わせや仕上げの手法には、地域性や時代の特徴が表れ、文化圏や製作時代を推測することが出来ます。



縄 文



粘土紐貼り付け

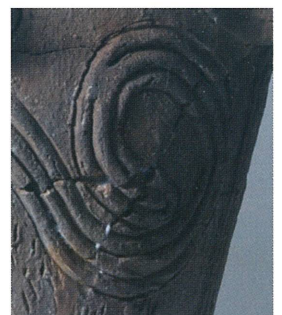
(写真提供：山梨県立考古博物館)

モチーフ

縄文時代中期、土器には縄文人の精神世界が描かれるようになります。縄文時代中期前半の土器には粘土紐を貼り付けた隆帯で三角形や楕円形に区画した中に平行線を描くなどしていますが、縄文時代中期中頃になると渦巻き文様が頻繁に用いられ、ヘビやイノシシ、カエルなどをデフォルメした文様や踊る人、出産する人などを表現した土器も増えていきます。縄文時代中期末に近づくると土器の文様は簡略化され、単純化されていきます。イノシシは多産の象徴、ヘビやカエルは冬眠から覚める姿から再生の象徴と考えられています。



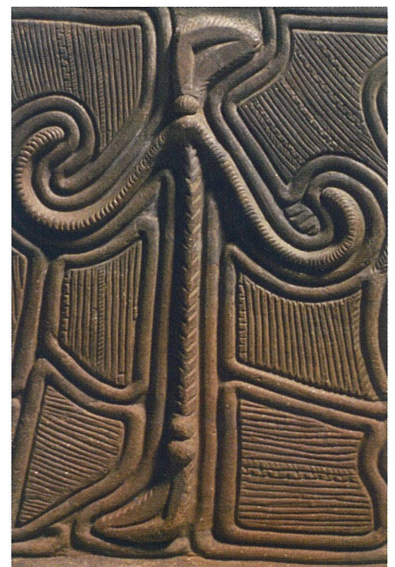
区 画



渦巻き



ヘ ビ



人 体

(写真提供：山梨県立考古博物館)

謎の4号住居跡、56号土坑！

一の沢遺跡（一の沢西遺跡） 4号住居跡



縄文時代中期中頃の竪穴住居で、井戸尻Ⅲ式と呼ばれる華やかな装飾を施した土器が何個体もまともに出土しました。土器が出土した面と住居の床面の間に土が溜まっていたことから、住居が使われなくなってから廃棄された土器であると思われます。これほどの優品を廃棄した理由は何か？謎が残る住居跡です。

一の沢遺跡（一の沢西遺跡） 56号土坑



56号土坑も謎の土坑です。このような狭い土坑に大型土器を何個体も詰め込んでいます。いずれの土器も優品揃いで、単純な廃棄行為ではないようです。何らかの祭祀行為に伴うものなのか、それとも貯蔵行為なのか、その謎は解けていません。



□交通のご案内

- ・中央自動車道 甲府南 IC より車で約10分
- ・JR 中央本線 石和温泉駅下車 タクシーで約25分

笛吹市教育委員会文化財課

〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部 809-1

電話 055-261-3342

FAX 055-261-3340

写真提供：山梨県立考古博物館

このスポットガイドは、文化庁の補助金を受けて作成しています。